

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	平成28年度第2回高松市創造都市推進審議会
開催日時	平成29年2月19日(日) 13:30～15:30
開催場所	高松市役所 3階 32会議室
議 題	(1) これまでの取組と今後の予定について (2) 次期「高松市創造都市推進ビジョン」の検討について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、佃委員、西成委員、大久保委員、三井委員、小池委員、橋本委員、山本委員、小林委員、山家委員、井本委員、山崎委員、渡邊委員
職 員	土岐創造都市推進局長、佐藤創造都市推進局参事、橋本産業経済部長、長井文化・観光・スポーツ部長、岡崎農林水産課長、三宅土地改良課長、吉井競輪場事業課長補佐、田中市場業務課長補佐、次田文化芸術振興課長補佐、大嶋文化財課長補佐、高本スポーツ振興課長補佐、合田美術館美術課長、平田産業振興課長補佐、溝渕産業振興課長補佐、塩田産業振興課係長、永木産業振興課主査
傍聴者	0人 (定員 10人)
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

- 1 開会
- 2 局長挨拶
- 3 自己紹介
- 4 会長選任

三井委員が佐々木委員を会長に推薦し、他の委員も承認。
佐々木会長が中委員を副会長に指名。

【佐々木会長からのひとこと】

5年前に、大西市長から「高松らしい創造都市」を作ってほしいと言われて、毎月1回くらい集まってビジョンを作った。

高松の創造都市の一番大きな特徴は「こども」が主なプロジェクトの1つになっていること。こどもの創造性を伸ばすということはとても大事。5年前だと、アーキペラゴが芸術士派遣事業もこれからもっと発展させていこうとしていた時期だったように思う。その後の取組によって、先ほど紹介のあった「第7回地域再生大賞の選考委員長賞受賞」につながっている。これはとても誇らしいことである。

また、瀬戸内国際芸術祭は3回という回数を重ねているが、男木島での小・中学校再開は非常に大きな成果。芸術文化がこどもにどんな影響を与えていくか、将来の担い手をどれくらい創造的に育ていけるか。私は「高松モデル」として広めていっていいと思うくらい優れた出来事だと思う。

審議経過及び審議結果

先ほど中小企業家同友会の経験の話があったが、「産業の育成」につなげていくためにどういう媒体、リンクージ（linkage/関係）を考えていくか、そのあたりを3期で議論を深めることが出来ればもっと広がると思う。

大西市長は非常に優れたリーダーで、「創造都市推進局」という局レベルの組織を作ったが、日本の自治体では高松にしかない。創造都市のリーダー的存在である横浜でさえ課レベル。最初は少し大きすぎるんじゃないかと思った。これは1つの実験である。市役所の中にどう新しい風をおこしていくか。前の局長は非常に張り切ってやられていたので、新しい風が起きていたと思う。じゃあ次はどうするか、これも3期目の課題である。

1期目にビジョンを作るときに、市役所の中の会議室ではつまらないから、北浜アリーや玉藻公園の披雲閣などアイデアがわいてくるような場所を会場にお願いしていた。事務局の人は困ったと思うが、結果的には良かったと思っている。できればまたそういう機会がある方がよい。

ここの委員は比較的シニア層が多いが、若い移住者がどんどん増えてくるようなまちがやっぱり元気がいい。若い人たちの声を反映させて、実験的な取組を応援しようということで、「U40」を作った。人見さんが頑張ってくれて、結果的には良かったと思っている。良かったところは確実に引きついで伸ばして行ってほしい。

5年というのは長いようで、まだ5年。私が金沢で創造都市会議を始めてもう20年になる。10年やってやっと形が見えてくる。市民への浸透ができなないのは当然のこと。まだまだ時間がかかるもの。

5年前に日本の中に創造都市のネットワークを作ろうということで、「創造都市ネットワーク日本」が立ち上がった。設立当初は23自治体だったのが、現在では88自治体にまで拡大している。

またユネスコの創造都市も当時は国内では3都市くらいだったが、7都市に増えており、世界116都市が登録されている。

それから、東アジア文化都市事業も盛り上がりを見せている。日中韓の文化大臣会合で決まって、2014年から始まった。これも順調に進んでいて今年には京都市が日本代表となっている。

世界的な規模ではユネスコがリーダーシップをとり、アジアでも関心が高まっている。国内では、中国四国では松山市も加盟している。つい最近では徳島の神山町が加盟した。いま徳島で消費者庁移転の話があるが、これは神山町が頑張っているようなもの。いま元気のある町は、多かれ少なかれ、芸術文化の創造性を地域再生に活かしている。これがかなり効果的だということが見えてきたので、政府も後追いでやってきている。

そういった中で3期目に取り組むので活発に議論を進めていきたい。

5 議題

- (1) これまでの取組と今後の予定について
- (2) 次期「高松市創造都市推進ビジョン」の検討について

【事務局説明】

みなさん、こんにちは。創造都市推進局 産業経済部長の橋本でございます。委員の皆様方におかれましては、本審議会の委員を快くお引き受けいただきありがとうございます。

この審議会は、創造都市の実現に向けた総合的かつ基本的な指針に関することや、創造性を生かしたまちづくりを推進するための施策及び取組に関することなどを御審議いただくために設置している附属機関で、平成24年度から始まり、今期で3期目となります。

本審議会1期目の皆様には、平成25年10月に策定した「高松市創造都市推進ビジョン」の内容を御審議いただきました。また、2期目の皆様には、ビジョンに基づく取組の進捗状況や課題と成果等について、御意見をいただいております。このビジョンの期間は平成29年度までとなっていることから、3期メンバーのみなさまには、平成30年度を始期とする次期ビジョンに盛り込む内容を中心に、御審議いただく予定としております。

今後のスケジュールですが、資料3をご覧ください。本審議会におきましては、本日の会で次期ビジョンの骨子案を御検討いただき、その後、7月に素案の検討、8月に原案の検討、10月に最終案の検討を進めていく予定で、平成29年度中に3回の開催を予定しております。

また審議会の開催と並行して、U40の開催や、パブリックコメントの募集なども進めて参ることとしております。

では資料4をご覧ください。

次期ビジョンの検討について、本日は大きな枠組みとなる骨子案で説明させていただきます。基本的な考え方としては、現行ビジョンを推進する過程で明らかになった課題を解決できるような内容とするとともに、現在の、本市を取り巻く周辺環境等を踏まえた内容の修正を行ってまいりたいと考えております。

最初に資料の4ページをご覧ください。まず現行ビジョンの成果については「①交流人口の拡大」と「②人がにぎわい、活力あふれるまちづくりの実現に向け、前進することができた。」の2点を挙げております。

この成果について、今年度の主だった取組をもとに説明いたします。資料5をご覧ください。まず、2～4ページですが、昨年行われました「瀬戸内国際芸術祭2016」について記載しております。3ページの表にありますように、外国人の割合が前回の2013年よりも、10ポイント以上増加しております。

また昨年7月に、香港線ができて、高松空港の国際定期路線は、4路線となり、過去最大の利用者数を記録しております。また、上海線が週4往復から5往復へ増便されており、香川県とともに国際空港路線の拡充や海外へのプロモーションに取り組んだこともあり、海外から県内への来航客、いわゆるインバウンドは着実に増加しております。

5ページは、都道府県別の外国人延べ宿泊者数の推移で、香川県は、四国の各県や対岸の岡山県に比べても大きな伸びを見せております。

6ページは、県内の外国人延べ宿泊者数の推移を、国籍別に見たデータでございまして、台湾からの宿泊者数が最も大きく、次いで韓国、香港、中国となっております。

7ページですが、昨年の楽天トラベルの外国語サイトを通じた宿泊予約数・人数は、「高松、さぬき、東かがわ」エリアが前年比伸び率で全国1位となったほか、2017年に台湾で人気上昇が予想される旅行先として、本市が8位となるなど、外国人観光客の本市への注目度は上昇しております。

また、8ページですが、国内外からの観光客等の受入環境を強化するため、昨年は、サンポート高松エリアや高松中央商店街等に公衆無線LAN環境「かがわWi-Fi高松」を整備したほか、デジタルサイネージを市内5カ所に設置するなど、パッケージによる環境整備を行いました。

9～10ページにありますように、昨年4月には、伊勢志摩サミットに先立ち、「G7香川・高松情報通信大臣会合」が本市において開催され、各国の関係者から、「地中海を思い起こす素晴らしい環境」「利便性の高い都市」など瀬戸内海の風景やコンパクトにまとまった本市の都市機能などに賛辞をいただきました。

また、11ページですが、昨年10月に開催した「創造都市政策セミナー2016 in 高松」は、「創造産業の育成から見る創造都市」をテーマに、事例発表、基調講演、パネルディスカッションの3部構成で開催し、全国の自

治体職員や高松市内の関係者など177名の方に参加いただきました。セミナー終了後の意見交換会ではユニークベニユーの1つである栗林公園商工奨励館を会場に利用し、翌日の視察では女木島・男木島で瀬戸内国際芸術祭の作品を楽しんでいただくとともに、地元の食材をつかった食事や男木島の移住者の方とお話していただくなど、高松の魅力をPRすることができました。

また、12ページですが、平成22年度から実施しております、「まちなかパフォーマンス事業」では、「たかまつ大道芸フェスタ」や「高松フラストリート」「街クラシック in 高松」などを商店街やサンポート高松で開催し、街角に芸術のあふれる文化芸術都市の実現と中心市街地の活性化に寄与しております。

この事業については、地元新聞の世論調査で、商店街やサンポート高松などで開かれる音楽イベントなどを県民の6割近くが「見たことがある」「見たい」と感じており、世代や性別を超えて支持されているという結果が出ております。

次に13～14ページですが、昨年11月には、ブレイルームを持つ子育て支援ゾーンや自然科学展示、プラネタリウムも併設した「こども未来館」を中心に、児童書を充実させた「夢みらい図書館」、平和記念館、男女共同参画センターを併設した「たかまつミライエ」が開館しております。本市では、「子育てするなら高松市」を掲げ、子ども子育て支援新制度に基づく事業など積極的に取り組んでおりますが、「にっぽん子育て応援団」の子育てに関する調査でも、108自治体中、第2位の高い評価をいただいております。

次に課題ですが、資料4の4ページとおり、「創造都市の事業展開の効果等を定量的に測定できない」ということが挙げられます。これは、平成27年9月議会において、「創造都市推進局設置後の成果と評価」という質問に対して、答弁した内容です。

それ以外にも、創造都市の概念の市民への浸透や、「世界指向」を意識した本市の国際的な認知度向上、策定過程におけるRESAS（地域経済分析システム）の活用や2020年東京オリンピックパラリンピックに向けた文化プログラムの推進など、次期ビジョンの策定において、反映していくことを検討すべき内容がありますが、まず、骨子のレベルで、大きく要素として盛り込もうとしている点は、「事業展開の効果等を定量的に測定する」という部分です。

それ以外の要素については、今後、素案の作成過程で、どのように反映させていくか、検討をしてみたいと考えています。

もう一つ、大きな変更点として、現行のビジョンは、「総論」及び「各論」の2部冊構成となっておりますが、コスト縮減の観点からも、総論と各論を一本化し、一冊の冊子として作成する方向で考えております。

これらのことを踏まえ、骨子案の中身をご説明いたします。資料4の1ページをご覧ください。

まず、資料の構成として、現行ビジョンと次期ビジョン案の構成を、目次レベルで比較するものとなっております。右端の列に、それぞれの項目の概要を記載しております。

骨子の段階では、具体的内容を記載するのではなく、こういったことを記載する項目なのか、ということの説明を、概要の欄に記載しております。

第1章「はじめに」のつくりは、現行ビジョンとほぼ同じで、(1)は次期ビジョンを策定する目的を、(2)は創造都市とは何かの定義を、(3)は次期ビジョンが対象とする期間について記載します。異なる部分としては、現行ビジョンは、2部冊構成としていたこともあり、(4)にビジョン構成という項目を設け、総論と各論の位置づけなどを記載しておりましたが、一本化に伴い、その項目を削除したいと考えています。

また、(5)の創造都市推進イメージについては、現ビジョン総論の5ページをお開きください。このページのイメージ図を踏襲しつつ、次期ビジョ

ンの内容に沿ったものに変更していきたいと考えています。

第2章「現況認識と課題の整理」についても、構成としては現行ビジョンと同じで、(1)では地域の歴史・動向を、(2)高松市の上位計画・関連計画について記載し、それぞれ内容を、時点修正していくことを考えています。(3)の、7つの視点については、現行ビジョンの12～13ページで掲げている、①創造的人材から⑦創造的ガバナンスまでの7つの政策指標を生かし、それぞれの視点から見た、本市の現状と問題点・課題等を記載したいと考えています。

第3章については、「目指す創造都市像」というタイトルとし、本市が目指す創造都市の姿を記載したいと考えています。

そのため、この章の冒頭に、現行ビジョンの総論冒頭2～3ページに掲載していた「高松らしい創造都市」のイメージイラストを移動するとともに、その次の(2)の部分には、イメージではなく、文章で、目指す将来像を具体的に記載するとともに、将来像の実現のために実施する創造都市推進事業の効果を定量的に測るための、大きな視点での成果指標を3項目程度、設定したいと考えております。

そして、その次の(3)および(4)の部分で、目指す都市像を具体化するための戦略や、アプローチについて、現行ビジョン総論15ページをお開きいただければと思いますが、そこに記載のある、「独創指向」「世界指向」「未来指向」の3つの指向や、総論の16～17ページ、第4章に記載のある、「場の創出」「創造的人材の集積」「編集・発信」の3つのアプローチを参考に、本市の現状を加味して修正した内容を掲載したいと考えています。

その次の、現行ビジョン総論18ページをお開き下さい。第5章については、一つの章を立てるほどの内容ではないことから、次期ビジョンにおいては、「ビジョンの推進体制」についてのみ、第4章の最後に移動し、行政・民間の双方におけるビジョンの推進体制を記載し、それ以外の部分については、必要に応じて、それぞれの関係部分に考え方を取り入れる方向で考えています。

そして、次期ビジョンの第4章には、「取り組むべき事業(プロジェクト)」というタイトルで、具体の個別事業について掲載したいと考えています。現ビジョンでいいますと、別冊としていた「各論」の内容をここに掲載するといこととさせていただきます。

最初に(1)として事業体系(現行ビジョンの言葉でいうと「各論」1ページの主なプロジェクト)を掲載し、個別事業をどのように体系づけて整理するかを記載することとします。プロジェクトの構成は、現行ビジョンの枠組みも踏まえながら、審議会やU40委員の皆様からも意見をいただきながら、適切な構成を考えてまいりたいと思っています。

その後の(2)では、事業体系毎に、現状と課題や目的、取組イメージ、また個別事業の内容と、その事業ごとの成果を測る指標を記載したいと考えています。なお、個別事業ごとの成果指標については、すべての事業について無理に設定するのではなく、数値で計れる指標が設定可能なものに限って、記載することとしたいと考えています。

最後の資料編では、次期ビジョンの策定体制(審議会とU40の位置づけ)や、それぞれの委員名簿、ビジョン策定にいたるまでの会議の開催経過を掲載するとともに、ユネスコの創造都市ネットワークやCCNJなどの取組の紹介を掲載したいと考えています。

また、本市の特徴として、本市を取り巻く社会経済情勢等のこれまでと今後の変遷が把握できるような、例えば人口とか産業関係のデータ、また、世界指向ということから、インバウンドの関係データなどを記載していきたいと考えています。

本日、委員の皆様には、ただいま御説明をいたしました次期ビジョンの骨子案について、御審議いただきたいと考えておりますが、事務局として、特

に御意見をいただきたいのは、「成果指標の具体案」についてと、「事業体系の構成案」についてです。よろしくお願いいたします。

事務局からの説明は以上です。

【御意見】

【委員】

数字におきかえないといけないというミッションなんですね。数字で測れることと測れないことがあるのは周知の事実。

前回、始まった時に感じたのは、「創造都市とはなんぞ」と議論していくプロセスで、創造都市推進局や市のみなさんと話していると、やわらかくなってきたなというのを感じている。やわらかくなっているなというのを数字で評価するのは難しい。

地域づくりの関係で、香川大学の大学院生が、子どもたちと保育園幼稚園の先生方の負荷ということで、かなりなアンケートをとった。まだ結果は聞いていないが、アンケートを定期的にやれば、そこでの指標がみえてくるかもしれない。アンケートをとるなら、腹を決め、定量的な定点調査をして、年次別の時系列で見ないと本来の変化は見えてこないのではないか。

【事務局】

何もかも数字で測れるとは我々も思っていない。これまでの経験上、数字で評価できないものが多々あるなか、無理やり数字で評価してもあまりうまくいかなかった経験もある。評価指標については、それなりにやれるものしかできないだろうと思っている。

ただ、我々としても、創造都市をみなさんにわかっていただくためには「こんなことができています」と具体的に説明できることも大事だと思っている。決して一律すべてが数値で評価できるとは思っていないので、そこはよく考えて検討したい。

【委員】

「創造都市の事業展開の効果等を定量的に測定できていない」とあるが「定性的な評価」と「定量的な評価」の両方必要ではないか。

測定をして、その評価を得ていく。それぞれの事業の効果はどういうふうに評価するかというのが目的なら、「定量的」だけでなく「定性的」な評価も入れるべき。

【事務局】

定性的な評価については、これまでもそれなりに行ってきたのではないかと考えているところではあるが、先生のお考えもあると思うので、そこはまた御意見を頂戴しながらと考えている。なんらかの形でやっていく必要があると考えており、そのやり方については、この会でも御意見をいただきながら進めていくべきだと考えている。

【委員】

先ほど会長から金沢市の話があったが、高松市よりも先行して創造都市に取り組んでいる都市などで、どういう指標でモニタリングされているかを、参考にしているかどうか。何を定量的に見て成果をあげてきたのかを調べるのは1つの方法かと。

【会長】

それはたぶん事務局の方でも勉強中だろうと思う。

【委員】

イベントなどいろいろやっている中で感じていることだが、行政と民間の距離を縮めることで、見えてくる部分があるのでは。数だけでなく実際に足を運んで、水面下の動きを行政の人たちもちゃんと見てほしい。

【委員】

評価指標の問題は大学でも抱えている。自分も大学で学生プロジェクトをしているが、効果を定量化しにくい。批判してくる人は、見に来てくれなくて、アンケートを取って数値化しても納得してくれない。何か賞をもらったりするとようやくちょっと認めてくれるくらい。評価はとても難しい。1回でも見に来てくれれば、どんなにいきいきした顔で学生が取り組んでいるか、感じてもらえるのに。

当初はU40の中でも「創造都市とは何か」という議論が白熱することがあったが、議論を続けていく中で理解が深まった感じ。メンバーがいろいろ交代する中で、お互いに理解し合うことを進めていかないと。

【委員】

2年前から「郷土料理を味わう会」というのをIKUNASでやっている。移住

の方が食べる機会の少ない香川の豊かな郷土料理を味わうための会。自分としては全く個人の活動という認識だったが、いま話を聞いていて、そういうのも創造都市の活動につながるなと改めて思った。

「Kinco.」さんや「点と線」さんなど、市内のゲストハウスでもいろんなクリエイティブなイベントが開かれていると思うので、こういう場所での定点観察からいかに個人の方々が創造的なことをしているかが見える。そういうのをジャンル分けしてカウントするだけでも見えてくるものはあるのでは。

【会長】

今言われたことはとても大事なこと。ビジョン各論の6つのプロジェクトについて、事務局は何かデータ化しようと努力をしたか。

【事務局】

6つのプロジェクトにぶら下がっている事業の中で、数値で測れるものについては進捗状況の把握に努めている。

【会長】

それなら今出してください。出せば議論がもっと具体化する。ああしようこしようだけでは進まない。

定量化できるものは簡単で、統計を集めれば簡単にできる。

質的調査はちゃんとした考え方をもって、このプロジェクトは創造都市のプロジェクトとして成功かどうかを判断しなければならない。それを小さいものから積み上げて行って、その結果どうだったのか、そういった評価がちゃんとできなかつたら前には進まない。

それを事務局が出さなかつたら委員は議論できない。次までに必ず出してください。それで相当苦労されると思う。

【委員】

自分もいま中間支援団体で働いているので、誰が見てもわかる数値で出した行政と、数値で測れないところが大事だという現場の意見、両方がわかる立場にいる。

総論と各論の1本化には賛成。

ビジョンを作ることが目的になっていないかなというのはすごく感じる。

例えば、「高松らしい創造都市」のイラスト。自分も好きだが、友達に見せると「いいね！」って言うってくれるけど「それで？」で終わってしまう。いいことを書いていても普段からまちづくりに関わっていないと、自分事として具体的なものに結びつかないのでは。一般の方がこれを見たときにどう感じるかがすごく大事ではないか。

これまでの議論を聞いていて、創造都市が目指しているのは、行政と民間現場の境目が極限まで薄い状態なのかなと思った。

【委員】

創造都市という言葉自体が概念である。総論の定義に「市民による、新たな活動が多数発生している都市」とある。新たな活動ってなんなのか。そのイメージがずっと出てこない、評価できないのでは。

広報を見ていても、創造都市に関する記事はほとんどなくて、出てきたとしても抽象論でしかない。一般の人が1つでも2つでもわかることがあれば、創造都市ってこんなものだよねと市民にも広がってくるはず。「創造都市」という抽象的なものを、みんなにわかりやすいものにしていくことが定量的評価につながるのでは。

【委員】

アンケートを取るとというのが数値化としては簡単。

金沢のモデルケースをマネするのもひとつ。

ビジョンに書いてある各論の事業はほぼ知っている。けっこうみんな知っていると思う。自分も関わっていけることを増やしていけたらと思う。

【委員】

これまで条例づくりの委員などでいろんな視点から創造都市推進ビジョンや高松市の施策をみてきた。いろいろやっているイベントなどが「創造都市」にひもづいたものであることが浸透していない。

あと、いろんなプロジェクトを行う時に、広報宣伝の広がりを意識していけたら。ビジョンのもとでの市の将来像を広報すれば、いろんな方面で動き出すのではないか。

中小企業家同友会に所属しているという立場から、一般の中小企業との連携も考えていけたらと思う。

【委員】

石あかりロードをやっているが、12年やってやっと認知されたかなというレベル。

期待するのは市が持つ発信力。細かい動きを吸い上げて、発信していくことが大事。以前はフェイスブックが活躍していたと思うがまだやっているのか。行政は広報に出しているとかいうが、自分自身広報はあまり見ない。

細かい動きをいろいろやっているのだから、行政がその動きを吸い上げて発信してほしい。

【会長】

昔は高松のフェイスブックはおもしろかった。更新の回数をみているとわかる。最近減っているのでは。意識的にやらないとすぐ出てしまう。定量化というなら、数字を意識しないと。

今日もここに来るまでに、芸術士の事業について、子どもたち何人に対してやっているのか聞いた。これがすぐに答えられなかったら定量化なんてできない。そのつもりになれば、活動について答えられるはず。

誰かに答えを作ってもらおうと思っているからだめ。間違ってもいいからとにかくデータをつくらなきゃ。コンサルに投げてみてもだめ。そんな頭のいいコンサルはいない。

金沢市との比較の話。金沢市は創造都市の拠点施設が非常に明快。誰でも21世紀美術館だってわかる。日本で最高の美術館になった。

高松市の美術館は拠点に位置付けているか？ヤノベさんのおもしろい企画についても、フェイスブックで発信したか？私は見ていない。でも私はヤノベさんに直接会ったから自分のフェイスブックで取り上げた。

例えばそういう努力をした上で、議会でこれだけやり込められたというのであればあなた方の努力は認める。

資料ができたなら説明してください。

【事務局】

ビジョンに掲げる6つのプロジェクトに関する取組みについてまとめたもの。

【会長】

6つについて実際どうだったか。いまの説明では質的に答えていないから

わからない。しっかり読み込んで答えないと。

高松市の創造都市推進局はたくさんの課からなっている。だから6つあれば6人別々の人がしゃべって、最後に局長がまとめればいい。

【事務局】

次回までに準備させてください。

【委員】

以前瀬戸芸のときに、サンポートでインドネシアの若い人に呼び止められて、両替の場所を聞かれたが、答えてあげることができなかった。市民として対応できなかったのもはずかしかった。市に言うのは酷かもしれないが、どこで言ったらいいものやら分からなかったのだ。

【事務局】

高松駅や空港の案内所では案内できるように対応している。

受入環境の整備ということで、WiFi整備やデジタルサイネージでの情報発信、また商店街の飲食店において、希望する店舗に対して外国語講座や指さし会話帳の個別店舗対応を市の補助制度で対応している。高松観光まちづくりネットワークなど、官民連携して機運を高めて、少しずつだが受入環境を整備し、インバウンドにつなげていきたいと思っている。

【委員】

この席で言っているかわからないが、香川は犬ネコ殺傷ワースト10の汚名がある。例えば数値目標でいうと、「創造都市高松は殺傷率ワースト10を脱却します」であるとか、「瀬戸芸に高松市民の40%は行きました」みたいな、これをやろうみたいなものを、創造都市推進局以外の部署も交えて、市としての目標を決めていくみたいなことはできないのかなと思う。

【委員】

自分自身、瀬戸芸が誰に来てほしいイベントなのか、わかっていないところがあったりするのだが、何のための事業か、目的を考えることで、その目標ができているかをみることが、数値化にもつながるのではないかな。

【会長】

瀬戸芸で、フラムさんや福武さんの想いはっきりしている。近代化の中で、ごみの山になった瀬戸内海を芸術の力で再生したいという「海の復権」を掲げているが、大西市長のいう「創造性豊かな海園・田園・人間都市」にもつながっている。

それだけでは具体化しないが、海外からどのくらいお客さんが来たか、国内からどのくらいのお客さんがきたか、その経済効果がどうなのか、それを出すことは簡単にできる。でもそれだけでは意味がないよねということで、じゃあ地元のひとたちはどれくらい行っているのか、世界中のアート好きしか来てないんじゃないかみたいな。創造都市はやっぱり地元の人たちが文化芸術に親しむことも大事だろうということ。

創造都市の指標の立て方はいつも一緒じゃなくていい。いまの局長が、何がやりたいのか。そこで目標を立てればよいし、市民にもわかりやすい。

高松市の創造都市の全国的にもユニークな点をもっと打ち出していった方がいい。それはこどもとか小中学校、このところをどれだけ元気にできているか。そういう数値をちゃんと見るべき。

批判のための批判は必ず存在する。イギリスの政府の例があるが、評価をやりすぎると大学の創造性が落ちる。研究者が評価書ばかり書かされるから。これでは本末転倒。創造性を高めるために評価するべき。

何のために我々は評価指標を作って評価して、前に進むか、そこをもっていないと。単に議会に言われて困っていますでは、出発点に立てない。よろしくをお願いします。

【委員】

先ほどWiFiについて報告があったが、フリーWiFiの施設をどんどん広げてほしい。

2020東京オリンピックパラリンピック後の発展、何を残せるかが大事だと思っている。文化プログラムも大事だと思うのだが、障がい者の方々に優しさを感じてもらえる都市になれば。個人的に補助犬や介助犬の事業をやっている。補助犬と一緒に来ても、一緒に泊まれる宿泊施設がほとんどない。個人的に動いて、県内で2件だけホテルで泊まれるようになった。障がい者の人にもやさしいまちづくりを目指してほしいというのが希望。

先日、行政と企業と学校の先生との討論会があったが、その中で「こども」が大切という結論に至った。3つが三方良しになるためにも、こどもを

中心に置くといいのではないかという議論があった。

【委員】

2021年にアジアで初開催となる「関西ワールドマスタースゲームズ」が関西と鳥取、徳島の8府県を会場に開催される。4年に1回の国際大会で原則30歳以上のスポーツ愛好者なら誰でも参加可能な大会。目標参加者数は国内から3万人、国外から2万人。海外からの大会参加者は、大会の開催前から開催後まで、平均で15.8日滞在すると言われており、経済効果はオリンピック以上とも言われている。開催都市では、オリンピックよりこっちに力を注いでいるらしい。徳島はトライアスロンやゴルフなど5種目の開催地となっている。その流れで四国の他3県にも観光客を呼び込めるチャンスかも。この大会のことを知らない方が多いので、逆にチャンスかなと。

あと、パラリンピックの話だが、スポーツ庁の方でこの3月に第2期の新しいスポーツ基本計画ができる。その中でこれから国が力を入れたいと言っているのが障がい者と女性のスポーツ支援。

香川のリハビリセンターの中に、障がい者スポーツ協会ができていますが、まだこれからどういうふうに支援していこうかという段階なので、そことも連携をとりながら高松市ならではの障がい者の支援につながればと思う。

【会長】

実は私も「関西ワールドマスタース」の委員をやっている。これは関西広域連合という広域自治体があって、狭い意味での関西だけでなく、鳥取と徳島も一緒にやっている。シニア層の参加が多いこともあり、経済効果はオリンピックよりもマスタースの方が高いのではとも言われている。香川県も上手にそれを活かすというのはひとつの戦略かも。次のビジョンの期間中にも入ると思うので。

それと、障がい者のスポーツの話も盛り上がっているが、障がい者アートも大変盛り上がっている。そういうものも新しいビジョンで、新たなジャンルとして組み込めたら。

【委員】

1つは創造都市という考え方については、現場を通して市民一人一人が気付いていくしかない。そこへどのようにしてつないでいくかが大きな問題ではないか。

創造都市のプログラムとしてやっているのかが不明確な部分がある。現実的に外国人観光客は増えているが、創造都市としてやっていることが原因なのか、簡単にはわからない。別のファクターもありうる中で、私たちが求めるものは、創造都市という概念の中で、最終的には市民一人一人が自分の暮らしを今より楽しく、心地よく、豊かにできる、そういう環境を自分たちで作れる人物になっていくんだという、そこが大きなポイントではないか。

1つ1つの結果をみているだけではわからない。その中で、最終的に求めるのは、市民一人一人が創造都市という概念コンセプトの中で、そういうものがなんであるかはずっと議論していかないといけない内容ではあるが、1つ1つを自分のものとして受け取って、それを自分たちが楽しむというところまで持っていかないといけない。そうすると今やっているものを、ここにいる人の分野も違うが、会長が最初におっしゃったリンケージの問題で、つなぎあわせながら、自分たちが楽しくなっていることを実感できる、そういう環境を作っていないと。現場とのつながりをどういうふうにもっていか、その方策がそろそろ考えられないと、ほかのものと重なっているだけで終わっていく気がする。

この審議会の位置づけも、いまだに十分には理解できていないが、高松市の総合計画とどのような関係の中で動こうとしているのかが分かりにくい。総合計画を考えている人にとっては創造都市は一部だからという意識。創造都市をつくるという概念そのものから言うとちょっとはずれてしまう。そういうあたりどういうふうにつなげていくか。

1つの行事が、現場現場で昨日よりも豊かになったねという1日にできるような関係を作り上げるような、具体的な部分も入れていかないといけない時期にきていると感じる。全体で創造都市と言っても、たぶん市民のところに届くときには具体的なプログラムの中でいくしかないけれど、それが自分たちが創造都市の中で自分たちもクリエイティブに楽しむことがこんなに豊かなんだということを実感できるようなそういうつながりを盛り込んで具体的に動かさないと大変かなと、私の感想と期待。

クリエイティブであることは、そんな評価にはのらないということだから、説明する場合には数字を使ったりして説明すればいいが、価値がないといわれてもそれはすごいことなんだと言えるのが創造都市なんじゃないかな。

【委員】

42万の高松市というスケール感で創造都市というふわっとした話をするのではなく、男木島なら住民180人、先ほど話にもでた学校再開、ネコに困っていたこともこんなふうに解決したとか、瀬戸芸に関わった島民の延べ回数は何千回にもなり、この人たちがこういうふうに変わってきましたよ、小さい島なんだけど、そこで起きた創造都市的5年間はこうでしたみたいな事例を出したら、とてもおもしろいサンプルになると思う。

神山があれだけ注目されるのは、徳島県じゃなくて神山という小さいエリアだから。高松という大きな括りではなく、男木島という小さな島で起きた出来事を創造都市的に書いて解説してもらえると、みんな、そんな奇跡のようなことがおこったんだねというふうにつながるのでは。

そんな中、定点の変化というのも定量的な数値と同量くらい入れてもらえればもっとわかりやすくなるのでは。

【会長】

次のビジョンに「男木島の5年間」をかいたらいい。男木島にしばらく変化がかけるはず。これってすごく大きなこと。どのコミュニティでも取組によっては可能性がある。そういうところまで持っていくとなるほどになる。確かに都市全体をどういう戦略でいくかというのはなかなか難しい。例えばここで「生活工芸」という言葉を使っているが、金沢では「生活工芸」と「未来工芸」という言葉を使い分けている。現代アートの美術館だけど工芸を未来工芸として取り扱おうとしていて、ニューヨークにも展開している。いよいよ国から地方創生の一環として近代美術館の中の工芸館を金沢に移転することが決まっている。これは都市としての戦略。だから小さなところの積み上げと大きめの戦略の両方がある。そういったものはここで議論する。

でも「高松らしい創造都市」の絵の5年先、10年先をみんなで描いたらおもしろいかも。創造都市推進局の人が楽しまないに進まない。

【事務局】

フェイスブックの取組み説明。毎月いいねの表彰。全国にいる高松観光大使に局のフェイスブックから情報発信をお願いしたりしている。十分ではないかもしれないが、今後も発信をしていきたい。

【会長】

新聞やテレビより、若い人はみんなSNSを使っているの、そこでおもしろい情報がひっかかってくるというのはクリエイティブだと思うので、頑張ってください。

【事務局】

次回の案内

今回は現在の予定では7月に開催を予定している。詳細については後日改めて調整をお願いしたい。

【事務局】

本日は長時間にわたる御審議、ありがとうございました。私どもの準備不足で、詳細な説明ができず申し訳ありませんでした。次回また改めて説明させていただきます。今日頂いた御意見をもとに骨子の方も考えてまいりたい。勉強不足な点もご指摘いただきましたので我々も努力してまいりますので、引き続きご指導よろしく願いいたします。本日はありがとうございました。